

常磐松文庫蔵『源氏物語覚勝院抄』

写二四冊

上野英子

(一) 書誌事項

写本。全二四冊揃本。袋綴。綴糸茶色（第一冊のみ白、近年後補による）。寸法縦約二六・九×横約一九・六糎。

表紙濃茶色蜀江型空押模様紙表紙（原装か）。中央に卵色布目地模様銀切箔散らし紙題簽（縦約一八・八×横約四・〇糎）

貼付。題字、第一冊目「源氏物語抄」号寛勝院抄
桐霊帚木空蟬。第二冊目「源氏物語抄 夕顔」、以下これに準ず。題字は全冊一筆。各

冊に青灰色角切を施し、「一」～「廿四」までの巻序を墨書。小口書は第一冊目に「桐 帚 空」の略巻名（墨書）、以下これに準ず。

内題、第一冊目に「源氏物語聞書」。本文料紙楮紙。片面一〇行。注小双行。第一冊奥（「空蟬」本文末尾）に「一校了」（朱

書)の校合奥書。第一六冊奥(「匂兵部卿」本文末尾)、第一七冊奥(「竹皮」本文末尾)、第二一冊奥「東屋」本文末尾)、第二三冊奥(「蜻蛉」本文末尾)に各々「公晴書之」(墨書)の書写奥書あり。

印記は「実践女子大学図書館印」「常磐松文庫」の他、図書原簿登録番号(第一冊目「五九二三三」)、第二四冊目「五九二五六」を捺す。木篋入り。篋蓋裏に打付にて「筆者／花園前宰相実満卿／前中納言公晴卿／全部廿四冊／外二冊」と墨書するも「外二冊」の意不明。木篋に現在の二四冊を納めると若干の余裕がある。

岩波『国書総目録』未収本。

〈書写者について〉

全冊一筆ではない。主となる書写者がいて、しかし第一六・一七・二一・二三冊目などは別筆のようである。別筆とみられるこの四冊には冊の奥に「公晴書之」と記されてある。篋書によれば、該書の書写者は花園実満・公晴父子であるという。すると「公晴書之」とある四冊を除き、他は実満筆ということか。

篋書にいう花園氏とは、正親町三条の支流である。内大臣正親町三条公兄の孫、近衛権中将公久の時に分れた。実満は公久の男で寛永六年(二六六)生。『公卿補任』によれば、侍従・右少将・参議等の官を経、貞享元年(二六四)に五六歳で薨。極官は参議従二位。

実満の男公晴(母は家女房という)は、寛文元年(二六二)生。五歳で叙爵。一〇歳で元服、同時に昇殿を許され侍従従五位上を賜わっている。延宝三年(二六五)、一五歳で右少将。同八年、二〇歳で右中将。父が薨じた時は二四歳であった。以後公晴は、参議・右近衛中将・権中納言を経、天文元年(二七三)七六歳で薨している。極官は権中納言正二位。

この実満・公晴父子を書写者とする篋書の記述を承けるならば、およそ以下のことが想定できるかもしれない。

一、笕書に「前中納言公晴卿」とあることから、笕書の記述自体は、公晴が権中納言を辞した享保二年（一七七年、公晴五七歳）以降、某人によって記されたものであること。

一、父子の共同書写作業であったとしているが、その作業の着手時期は、実満が薨じた貞享元年（一六八四）以前に求めねばならないこと。五十四帖中、公晴筆とみられるものが僅か四帖にすぎないことから、主たる推進者が実満の方であったことが窺われる。

一、更にその上限は、実満薨時公晴二四歳であったことから勘案して、公晴一〇代に相当する延宝年間頃（一七三三～一七四〇）迄は溯らせることが出来るのではないということ。

それにしても、延宝年間といえは、元年に北村季吟の『湖月抄』が成立（同跋文）。翌年には早速初版が刊行されている。この時期実満は一子公晴と共に『覚勝院抄』という古注集成の注釈書を全冊書写し始めた、ということになるわけで、おそらくそれはそれまでに提示されてきた諸家の注釈をまとめ、体系化しようとする時代風潮の現われでもあったのだらう。想像をたくましくするならば、そこには王朝文化継承者たる公家としての自負心も働いていたものか。猶、野村精一氏所蔵の花園実満筆短冊と該書の筆跡とを見比べると、両者はよく似ている。

〈書入れについて〉

該書には、書写成立後、本行とは別筆で種々の書入れ注記がなされている。それは主に第一～七冊目まで。巻名でいうと「帚木」（なぜか「桐壺」の方には殆ど無い）から「薄雲」までの諸巻に集中している。朱或いは薄墨を用いて、先行注を転写、時に「愚案」として自説も加える。余白に記し、書き切れない場合には付箋を付けて記入している。引用された先行注は、大部分が『岷江入楚』。他に『花鳥余情』『弄花抄』『細流抄』『孟津抄』等もみられるが、『岷江入楚』から

の孫引きであった可能性もある。この書入れ注の問題については次稿で詳しく取り上げることにして、本稿では先ず、書入れの施される以前、即ち筥書を承けるならば、実満公晴父子の手で書写が完了した時点での該書について、その特色をみてゆくことにする。

(二) 諸本分類

現在、確認できた『覚勝院抄』の諸本は都合二三本に及ぶ。うち二一本については『源氏物語聞書 覚勝院抄』第一〇卷（平成三年 汲古書院刊）付載「別冊」に、「諸本略解題」として紹介。二本は岩坪健氏の御教示を得た（三条西家の講釈——穂久邇文庫所蔵『覚勝院抄』をめぐって——親和女子大学「親和国文」二七号所収）。各写本の巻毎の分冊状況については、文末（一〇一頁の前）に一覧表を掲示しておく。

さて同「別冊」所収の、野村精一「穂久邇文庫本 覚勝院抄について——本文批判の方法論のために——」によれば、これらの諸本はおよそ次の三つに大別できるといふ。

第一群 初期稿本グループ

第二群 通行本グループ

第三群 後期増補本グループ

野村氏によれば、第一群には先ず稿本とみられる穂久邇文庫本、それに同本をほぼ忠実に転写したと思しき国会図書館本と天理図書館蔵万治奥書本を加えた、以上三本が入るといふ。その名の通り初期稿本の面影を色濃く残した本文である。

第二群の通行本グループには一七本が入る。第一群と異なる第二群諸本の特色については後述する。

第三群に入るのは、東京大学図書館蔵の足代弘訓書入れ本と本文芸資料研究所蔵三条西家旧蔵本で、本稿で取り上げた常磐松文庫本も又、これに属するという。野村氏によって第三群と分類されたこの三本は、いずれも後代の利用者が『岷江入楚』『湖月抄』『玉の小櫛』等の注釈書をもとに各々独自の訂正・書入れを行なっており、殊に前二本は『寛勝院抄』本来の注文を胡粉等で塗消した上に、各々独自の書入れを試みている。その意味では新しい独自の注釈書の完成を目指したものの、ともいえるわけで、氏がこの三本をして、第一群や第二群の諸本と区別されたのも、そのためであろう。

とはいうものの、足代弘訓本にせよ三条西旧蔵本にせよ、常磐松文庫本にせよ、各々書入れがなされる以前の姿はどうであったのか、——換言するならば、後代書入れによって第三群に分類されたこの三本は、その書入れが入る以前には、

(一) 第一群初期稿本の本文であったのか

(二) 第二群通行本の本文であったのか

(三) 両群の混成本であったのか

この問題については、これから個別に分析してゆかねばならないようである。本稿のねらいもその点にあるわけだが、分析を始める前に、先ず第一群と第二群との相違点について、まとめておくことにする。

〈第一群本と第二群本との相違点〉

第一群の、とりわけ稿本とみられる穂久邇文庫本について、筆跡その他から、その成立過程を推測するに、およそ以下のようであったかと思われる。先ず物語本文と聞書等で構成された基礎稿が成ったのち、これに数次にわたって複数者の手による書入れが加えられていった。

その最も早期の書入れとみられる一つに、「三亜説」という肩付で始まるものがある。「三亜説」とは「三亜説」を紹介した「藤袴」の付箋文末に「三亜実澄説也」とあることから、三条西実澄の説であったようである。この「三亜説」書入れは、例えば「桐壺」の巻頭の総論的注文の上欄余白に次の如くある。

三亜説

源氏物語聞書 或説并料問加之

大昔源氏物語ト
云物在之依其

桐壺第一

此聞書此紙一丁ノ詞稱名院仍覓被_レ遂ニ覽一
遣遙院作云々 弄花ノ序也 追_ト肖相讀也

光ト云字ヲ
上ニ置テ

時代寛弘ノ初造ニ出之ニ 康和流布 寛弘ヨリ文明十年迄四百
八十余年也然者元龜二年
マテハ五百七

光源氏ノ物語ト
云也乍去前ノ

作者紫式部ハ藤原ノ為時ノ女也或説見ニ河海抄ニ并 十四才
歟

源氏物語ト
云物ハ姿ヲモ

花鳥餘情等ニ也

見タル人モナ
キト也

……………

(穂久邇文庫本「桐壺」二丁オ)

本行の上欄余白に書入れられた「三亜説」の注文は、その筆跡からみて、どうやら本行「康和流布」の下の割注の後半部、即ち「然者元龜二年マテハ五百七十四才歟」と同筆であるらしい。割注の前半「寛弘ヨリ文明十年迄四百八十余年也」の方は、本行と同筆で、これらは『弄花抄』巻頭総論的記事からの転載であるのだが、「三亜説」の書入れ者はこの『弄花抄』の記載をまねて、自らが書入れを施した年次を「然者元龜二年マテハ……」と追記したものである。

元龜二年（二七）といえは、これに先立つ僅か二年前、三条西実澄は十数年の長きに及んだ東国在住生活に別れを告げて上京している。『お湯殿の上日記』『継芥記』等によれば、彼は上京後まもなく、宮中での源氏講尺を担当するなど、源

氏学者として精力的な活動を開始した。『覚勝院抄』の「三亜説」書入れは、この時期の実澄講尺をうけての聞書であったとよみとれるようである。但しこの書入れは、全巻に記されたわけでなく、「桐壺」「帚木」「空蟬」「夕顔」に集中してみられ、他に「紅葉賀」「柏木」「紅梅」「竹皮」等にも若干散見されるが、その分量は巻を追う毎に少なくなっている。さて穂久邇文庫本『覚勝院抄』には、この書入れがなされた後に、やがて「三大」「隆」「昌」「昌叱」「覚」等の肩付で始まる書入れも加えられていった。

そのことは、この書入れが、先の「三亜説」の注文に、抹消線を入れたり訂正を施したりしていることから窺われる。また注文の中で、実澄をして「三光院」と呼んでいる（一例を挙げれば『紅葉賀』六八丁ウ「三光院ニモ我ヲ女ニテ源氏をみはやとの心也」等々）。おそらくこの書入れは、実澄が出家し三光院と号した天正七年（一五七九）以降のものであろう。「三亜説」書入れを元亀二年頃とするならば、それより八年以上の歳月を経たものであることが窺われるわけである。

筆跡を追ってゆくと、この書入れ者は、「帚木」では青墨を用い、やがて朱墨に色を替え、続く「空蟬」「夕顔」では朱。「夕顔」の途中から再び薄墨に色を替え、以下ずっと薄墨を用いて「若紫」「末摘花」「紅葉賀」「葵」「花散里」「明石」「曙標」「紅梅」「竹皮」「椎本」等に書入れている。但し『覚勝院抄』全冊にまたがるものではない。よく書入れているのは「帚木」から「紅葉賀」辺りまでで、以後は急激に少なくなっている。

この書入れは「三大」の肩付で示されるものが多いため、本稿では便宜上、これを総称して〈三大書入れ〉と仮称しておく（但しこの〈三大書入れ〉以後も更に朱・墨書入れがある点断わっておく）が、興味深いことに、この〈三大書入れ〉等が、どうやら第二群通行本グループの諸本には入っていないようなのである。第二群の諸本は、〈三亜説書入れ〉が入った後、〈三大書入れ〉等の入る以前に写されたところの、そうした本文の系列をひいているのではないのかと思われる。野村氏にかかる第二群本文をして「通行本グループ」としている。現存する『覚勝院抄』諸本中ではこの形態のも

のが最も多く、とりもなおさずそのことは、この本文が普及していたためであろうから、「通行本」とされたのであろう。従って、第一群初期稿本グループ三本と第二群通行本グループ諸本とを区別する大きな特色の一つは、どうやらこの〈三大書入れ〉の有無にあるらしいのだが、但し注意すべき問題がある。

一例を挙げよう。陽明文庫蔵源氏物語写本五十四帖は『源氏物語』の代表的写本として有名だが、巻の多くが青表紙系でありながら、一部の巻は河内本系や別本となっている。同様の現象は『覚勝院抄』諸本の中でも起こりうるのではないのか。たとえ通行本グループと分類されても、一部の巻が初期稿本グループである本文——無論、その逆でもよいのだが——そうした本文の存在する可能性も否定できないのではないか。

現に、第二群の代表的一本とみられる宮内庁書陵部蔵桂宮本だが、その「紅葉賀」は〈三大書入れ〉をもち、注文の本文も第一群系である。かかる例が見出される以上、今後は諸本各巻毎の精査が必要となってくるのは勿論であろう。

では、常磐松文庫本の場合は如何であろうか。

結論を先にするならば、大半は〈三大書入れ〉をもたぬ第二群の本文であるものの、「空蟬」「夕顔」の二巻だけは、部分的にはあるが〈三大書入れ〉を有しているようである。但し両巻ともに、穂久邇本にみえる〈三大書入れ〉を全面的に踏襲しているわけではない。殊に「夕顔」は断片的に垣間見られるだけである。

次にその顕著な例を翻字してみよう。比較のため、はじめに第一群穂久邇本の本文を掲げ、次に常磐松本を翻字する。第二群の本文（桂宮本を採用）は必要に応じて取り上げることにする。翻字に際し、各本とも句点や朱引等は全て省略。また常磐松本の常磐松本たる所以のもの、即ち同本独自の例の後代書入れの部分は、これを細い実線で囲むことにした。更に〈三大書入れ〉による訂正・注文等はゴチック体で示しておいた。但し〈三大書入れ〉による抹消線だけは、該当本文の傍に太い実線を引くことで、その意を示すことにした。よって傍にひかれた太い実線は〈三大書入れ〉による抹消線、

本文の中央に引かれた細い実線は、それ以外の書入れ者の手になる抹消線と理解されたい。猶、便宜上、各本文の下に、通し番号を付しておく。

〈空蟬〉

はじめに「空蟬」からみていこう。分りやすい物語冒頭の部分で三本を比較してみることにする。

穂久邇本（九四丁オウウ）

源氏の御事也三天中川の宿ニとまり給ての事也

一ねられ給はぬまゝにわれはかく人にま

三大 源氏 自稱ニ非ス小君ニ對シテノ給詞也
の好色ヲ

れてもならはぬをこよひなむはしめて

昌叱ハ 自稱ニ
デハナイ ト読如何
三光院 自稱也

うしと世をおもひしりぬれははつかしく

てなからふまじうこそ思ひ成ぬれなどの

三大

小君也 我ハカク人ニクマレモナラハヌヲト有詞爰ノ小君カ泪ヲサヘコホソテノ
給ヘハ涙をさへこほしてふしたり

△ 自稱ニテ 詞ニテ源氏ノ
ナギ事聞え
タル也

①

②

③

④

⑤

聞書

同花説

ねられ給はぬと有も中川の宿にての事成へし

箒木の巻の終の詞につけてかける也 われハかく

人にくまれてもならはぬをと云ハ うつせミのやう

なる人には いまだあひ給へぬと也 これにて源氏君の

好色ガみえたる也 源氏の御やうたいをミテ小君か

なミたをこほしたるなり

勞へ一段懇ナル
事也

勞タシ
ネギラウ
タシハ読ツケ也

源氏の御心也 小君カ事也 幼人ナレ共おとなしきと也

文王勞テ問フ 一いとらうたしとおほすてさぐりのほそく

太公望ニ問ハレタル事也

辛勞ノ心ト思テハ違也 源氏の御そはにねさせられて也

此物語の作様前ノ事カ後ニハ済とスル也空せミの髪ノヨカラヌ事ハ前ニ不レ見とも爰ニテ

被レ知タル也

小君ハイマタ兒 ちいさきほとかみのいとなかゝらさりしけ

程ナルニ髪ノ

似タルトアルニテ

被レ知タル也

三大 の氣はひ

空せミによく似たると也 手さぐり よう
はひのさまにか 小君のありさまうつ蟬の手さぐりに。似かよひたると也
三大 なるもおもひなしに

一 (94オ)

14

13

12

11

10

9

8

7

6

やあはれ也同源氏の御心也あなにかにかゝつらひたとり

よらんも人わろかる人聞あしき也へくまめやかにめさまし真実 真成ニノ儀也

とおほしぼわろかるへくまめやかにあかしつゝ

三大まへのやうにもないと也小君の事也 聞書
例のやうにも・の給ひまつはさす 又小君に
れい にも ツハズ

三大まつはすハ織也 たりより

給はん事も如何とおほしめしていつものやう
にも結句なうて明し給也

常磐松文庫本(一二五丁ウ)

源氏ノ御事也

一ねられ給はぬまゝにわれはかく人ににくま
三天中川のやとにとまり給ての事也 源氏ノ自稱ニ非ズ小君ニ對シテノ詞也

れてもならはぬをこよひなむはしめて

三大源氏の好色ヲ自稱也昌叱自稱テハナイと讀如何
三光院自稱也

うしと世をおもひしりぬれははつかしくて

ねられ給はぬまゝに
花は是ハ常木卷の終の
詞につゞけて書り
箋云はゞきぎの卷の末を
書残して引分書たるハ空せミノ
列傳とミせん為也さるハ此
中川の方違の事をハミナ此
卷に書べきをはゞ木々の餘り
末にくわへたるハ彼まきの餘り

品さためなどのことはりにて
すくみ過たる故にいろへて
書るなりと云々

なからふましくこそ思ひ成ぬれなどの給へは

三太

小君也 我ハカク人ニニクマレモナラハヌヲト有詞爰ノ小君カ泪ヲサヘヨホシテノ詞ニテ源氏ノ自称ニテナキ事ト聞え
なみたをさへこほしてふしたり

タル也

聞書ねられ給はぬとあるも中川の宿にての事なるへし

同 花説 筈木の巻の終の詞につゝけてかける也 われはかく人にゝ

くまれてもならはぬをとへうつせみのやうなる人に

はいまた逢給はぬと也 これにて源氏の君の好色見えたる

也源氏の御やう躰をミテ小君か涙をこほしたるナリ

くらうたくおほす
ふかく思ひいたはる心なるへし

源氏ノ御心也小君か事也幼人ナレ共おとなしきと也源氏ノ御そはニねさせられて也
一 いとらうしたとおほすてさぐりのほそく

勞ハ一段懇ナル事也勞タシハ讀ツケ也・文王勞テ問フ大公望ニ問ハレタル事ナリ辛勞ノ心ト思テハ違也

此物語ノ作様前ノ事カ後ニハ済ミスル也空蟬ノ髪ノヨカラヌ事ハ前ニ見トモ爰ニテ被知タルナリ小君ヘイマタ児程ナルニ髪ノ似タルトアルニテ

被知タルナリ

ちいさきほとかみのいとなかゝらざりしけはひ

のさまにかよひたるもおもひなしにやあはれ
空せみに能似タルト也 三天小君のありさま空せみの手さくりに似かよひたると也

33

32

〔125ウ〕

31

30

29

28

27

26

25

24

同源氏ノ御心也かやうにつれなきをしめてしたらむいかゝにて真実めさましくつらしとおほす也
あなにかちにかゝつらひたとりよらんも人わ

人聞あしき也 真実セイ眞成ニノ饒也
ろかるへくまめやかにめさましとおぼしあかしつゝ

三大まへのやうにもない也小君の事也

例レイのやうにもの給ひまつはさす
纏ノ字也

開書又小君にたとり。給はん事も如何と思召ていつもの様にも結
より

句なうて涙し給也

桂宮本（九十一丁ウ）

源氏の御事也
一ねられ給はぬまゝにわれはかく人にくまれ
源氏ノ自稱ニ非ヌ小君ニ對シテノ詞也

てもならはぬをこよひなむはしめてう

しと世をおもひしりぬれははつかしくて

なからふましうこそ思ひ成ぬれなどの給へは

小君也我ハカク人ニクマレモナラハヌヲ有詞爰ノ小君カ泪ヲサヘコホシテノ詞ニテ源氏ノ自稱ニテナキ事聞エタル也
なみたをさへこほしてふしたり

聞書 ねられ給はぬとあるも中川の宿にての事成へし筈木
同
花説 の巻の終の詞につゝけてかける也 われはかく人にく

まれてもならはぬをとハ空せミのやうなる人にかいま

た逢給はぬと也 これにて源氏の君の好色見えたる

也源氏の御やう躰を見て小君か涙をこほしたるなり

源氏ノ御心也小君か事也幼人ナレ共おとなしきと也源氏ノ御ではニねさせられて也
一い^{ラカシ}とらうたしとおほすてさぐりのほそくち

勞ハ一段懇ナル事也勞^{ラカシ}タシハ讀ツケ也文王勞テ問フ太公望ニ問ハレタル事也辛勞ノ心ト思テハ違也

此物語ノ作様前ノ事カ後ニハ濟^{スミ}ニスル也空セミノ髪ノヨカラヌ事ハ前ニ不^レ見トモ爰ニテ被^レ知タル也小君ハイマタ見程ナルニ髪^ノ
似タルトアルニテ被^レ知タル也

いさきほとかみのいとなかゝらざりしけはひ

のさまにかよひたるもおもひなしにやあはれ
空セミに能似タルト也

也あなかちにかゝつらひたとりよらんも人わ
同源氏ノ御心也

人聞あしき也 真実 真成^{セイ}ニノ儀也
ろかるへくまめやかにめざましとおほしあかし

つゝ例のやうにもの給ひまつはさず

聞書又小君にたどり。給はん事も如何ト思召ていつもの様にも結句
より
なうて明し給也

常磐松本は、穂久邇本が⑨⑩⑫⑬⑭の上欄余白等に分散させて記してあった注を、⑮の左注におろし、ここで一括してまとめてしまっている。これは桂宮本も同様である。又穂久邇本が物語本文のあとにそのまま続けて記した聞書注文(⑮⑯⑰)を、⑳で改行して記している。これも桂宮本と同じ体裁である。更にその㉑の注文においても、常磐松本と桂宮本とは共に「より」が補入記号を付して傍書されている。このようにみてるならば、常磐松本と桂宮本とはかなり強い親密度を示しているといえるだろう。

しかしその一方で、常磐松本は㉒左 ㉓右 ㉔右 ㉕右の六ヶ所の行間注に於いて、穂久邇文庫本の〈三大書入れ〉と同じ注文が記されてある。しかも穂久邇本同様朱筆である。これらは第二群の桂宮本には全くみられない注であるから、常磐松文庫本の「空蟬」に、何がしかの形で第一群の本文が投影していることは否定できないようである。

尤も、常磐松本に、穂久邇文庫本の〈三大書入れ〉の全てが投影されているわけではない。

例えば③「う」 ④「なり」「ななん」 ⑤「△」 ⑥「也」 ⑦「いた」 ⑧⑨⑩⑪の見消ち(というよりも墨ベタによる本文の塗消とでもいうべきか) ⑫の抹消線 ⑬「三大まつはすハ纏也」 ⑭の本文塗消等、以上十二に及ぶ〈三大書入れ〉は、常磐松本には全く記されていない。この記されなかった十二例中、実に十例までが、訂正を扱った箇所である。すると、どうやら常磐松本は、〈三大書入れ〉によって新しく付加された行間注を継承しつつも、〈三大書入れ〉による本文訂正の方は、多くこれを継承しなかったようである。

更に次のような例もある。物語本文「われはかく人にゝくまれても……」の「われ」に対する注である。穂久邇本①の

傍注「源氏自稱ニ非ス小君ニ對シテノ給詞也」は、〈三大書入れ〉によって「三大 源氏の好色ヲ自稱ニ云給也昌叱ハ自稱デハナイト読如何三光院自稱也」と訂正された。ところが常磐松本は、訂正以前の傍注をそのまま残し(21)、その一方で訂正によって出来た注文も書き加えている(22)。だが余白がなかったためであろう、訂正以後の注文の方は、問題となつてゐる物語本文「われはかく……」の次の行「こよひなむはじめて」の左行間に記入した。だが引込み線等を用いて物語本文「われ」とこの訂正注とを結ぶ工夫を施さなかったため、一見するとこの訂正注は、まるで物語本文「こよひなむ……」に対するものの如き印象さえ与えてしまつてゐる。

同様の例は⑭にもある。穂久邇本によれば、「空せみによく似たると也」の傍注は〈三大書入れ〉によって全文抹消され、代りに「三大 小君のありさまうつ蟬の手さくりによく似かよひたると也」という注文が記されてあるのだが、常磐松本は訂正以前の注も訂正による注も、二つながら併記している(33)。但しこちらの方は、行間に余裕があつたために、不自然な位置に無理矢理書き入れられることはなかったようである。

このようにみえてくるならば、常磐松本「空蟬」は、〈三大書入れ〉の入った第一群本を書本としたのではなく、桂宮本の如き第二群本を書本とし、その上で第一群本とこれを対校。書本になかった注などを適宜取捨選択しながら朱筆で書き加えていったかとも推測できるのではあるまいか。

〈夕顔〉

次に「夕顔」をみてみよう。先ず冒頭の、巻名及び巻頭注のくだり。

穂久邇本(二丁オ)

・夕顔二並也、
堅ノ並也 遙 稱名院講尺ノ聞書

三大

此卷は歌と詞をもて為ニ卷ノ名ニ源氏十六

歳の夏より十月までの事みえたり當流
列傳也

三大

年の事史記の本記の外ニ列傳を立た同じいと也

常磐松文庫本（二丁オ）

∴夕顔ニ並也 堅ノ並也 遙 稱名院講尺ノ聞書

三大

此卷ハ歌と詞をもて為ニ卷ノ名ニ源氏十六才の

夏より十月までの事見えたり當流列傳也

常磐松本は⑥「三大」⑦「當流列傳也」の二ヶ所で、穂久邇本〈三大書入れ〉と同じ本文を記している。桂宮本には全くみられなかった本文で、しかも常磐松本ではわざわざ朱筆で記してある。従つて「夕顔」に於いても、常磐松本には第一群本の本文が投影しているらしいとの見通しはつく。だが同じ〈三大書入れ〉でありながら、穂久邇本④行目の注が常磐松本には入っていない。これは穂久邇文庫本がこの書入れに墨で抹消線を引いたためなのだろうか。（同本に〈三大書入れ〉以後も種々の書入れがなされたことは前述した。但しこの場合は、朱から墨へと筆を換えた〈三大書入れ〉者自らの訂正とみる。）だが次のような例もある。

穂久邇文庫本（四丁ウ）

源氏ノ御詞也

ヒニをちかた人に物申すとひとりこち給

①

⑦

⑥

⑤

④

③

②

不讀トモ

三説河ノ説トハ違也

をみすいしんつゝゐてかのしろくさけるを

いれて

トハ

遠方人ニ申ト源氏ノ御心ニハスキ影ノ女ノ事の給也白キヲ思給テノ給ニハ非サル也便モガナト思ノ給事也

なんタかほと申はへる

随人ノ心ニハ白キヲ尋給ト心得タル也

タかほをハさふらひ以上の家にハうへぬ物也

古今ニハ

梅ノ事ヲ云リソレヲ引違

タル也

三大

続古今小侍徒か哥

咲にけり遠かた人ニこと

とひて名をしり

そめしタ顔の花

こゝの心をととり用た也

古今

引歌

河云

此本哥ハ梅ノ花也されともしろくさけるハと云に

つゐて今ハタ貞の花におもひよそへられた也云々

花云一源氏の遠方人に物申すと口ずさみ給ハ何の

花そと問給心也さて御隨身夕貞とハ答へたてまつる也

花そと問給心也さて御隨身夕貞とハ答へたてまつる也

常磐松文庫本 (四丁ウ)

源氏ノ御詞也

源ノロスサミノ給フ也

源氏當官中将也仍小隨身たるへき歟

一をちかた人に物申すとひとりこち給をみすいし

三説河ノ説トハ違也

むつゝゐてかのしろくさけるをなんタかほと申

遠方人ニ物申ハ源氏ノ御心ニハスキ影ノ女ノ事ニノ給也白キヲ思給テノ給ニハアラザル也便モカナト思召テノ給事也

はへる

隨身ノ心ニハ白キヲ尋給ト心得タル也

咲にけり遠方人に事とひて名をしりそめく夕貞の花新統古前右衛門督さきてこそ賤か垣ねのかすならぬ名もあらはなれタかほの花

古今ニハ梅花
の事を云り、ソレ
ヲ引違タル也

古今
引哥

打渡す遠方人に物申我そのそこにしろくさけるハ何の花そも
行とる心地

河云

此本哥ハ梅ノ花也されともしろくさけるハと云につきて今は

夕貞ノ花におもひよそへられたる也云々

花云

源氏ノ遠方人に物申すと口ずさみ給ハ何の花そと問給心也

さて御隨身夕貞とハ答へたてまつるなり

一見して明らかな如く、常磐松本には穂久邇本の「三大書入れ」が全く投影されていない。このくだり、実線で囲んだ後代書入れの部分省けば、常磐松本は桂宮本と一致する。「夕顔」における穂久邇本の「三大書入れ」は、もとの本文が解説不能なまでにびっしりと書き込まれた箇所も少なくはないのだが、常磐松本は、かかる注文を承けることなく、第二群と同じ本文である場合の方が多いようである。但しなかには極く稀にだが、次のような例もある。

穂久邇文庫本（二十丁ウ）

其時の躰也

三天

一霧のいとふかきあしたいたうそゝのかさ

あなち忍給ハね共明ぬとそゝのかしたて
られて
おき給
さま也

れ給てねぶたけなるけしきに打敷き

御休所より源氏の出給也これは御休所の女房也

つゝいて給を中将のおもとみかうし一ま

③

②

①

源氏の御婦を御息所へ御覽しをくれとおほしくて也
あけてみたてまつりをくり給へとおほしくて也

御木丁ひきやりたれは御くしもたげて

見いたし給へり前栽の色／＼みたれたるを

すぎがてにやすらひ給へるさまけにた

くひなし廊のかたへおはするに中将の御

三大 弄云 世の常ニハ紫苑色の裳と心えたる款辭事也紫苑色のきぬに物の裳也
もにまいるしをん色の。おりにあひたる
三大 同中将の衣装也 爰ニテ句ヲ切テ可讀也

三大 紫苑 色とはおもてハ蘇方うらハ萌黄也
うすものゝもあさやかにひきゆひたるこし

つきさはやかになまめきたり見かへり

三大

御息所を^ミか^給れて又心をうづされうずる事ハつゝめとも云心也
給てすみのまのかうらんにしはしひきすへ

中将君の躰也
給へり打とけたらぬもてなしかみの
さかり

はめざましうもと見給ふ 源氏の御心也

源氏

咲花にうつるてふ名はつゝめともおらて過うきけさの
あさかほ

花云

權ハ中将ノ君にたとふる也これハあさかほに女をた

とへたる也 毛詩ニ有^テ女同^ウ車^ス顔^ハ如^セ薜^{アサカハ} 花ニ云々
隆

心ハ官女の中將の君ニ心ヲうつさるゝ事ハあるまい事であれ共と忍バるれ共
おらてハ過うきの心也

常磐松文庫本（十九丁オウウ）

三大

其時ノ躰也
一霧のいとふかきあしたいたうそゝのかされ
あなち忍ひ給ハねとも明ぬとそゝのかしたて
られておき給さま也

給てねふたけなるけしきに打敷きつゝ

打敷つゝ
源のいたくそゝのかされて起
たる躰又ハ絶まかち
なる間御息所の打とけ
給ハぬを源の打なけき
て出給成へし

御休所ヨリ源氏ノ出給也これハ御休所ノ女房也
いて給を中将のおもとみかうし一まあけて

源氏ノ御帰を御休所へ御覧じをくれとおほえて也
みたてまつりをくり給へとおほしく御木

御木丁を少引のけたる也中将の心つかひ面白し

丁ひきやりたれは御くしもたけてみいた

し給へり前裁の色／＼みたれたるを

すぎかてにやすらひ給へるさまけにたくひなし

廊のかたへおはするに中将の御とも

三
天
同中将ノ衣装也 爰にて句ヲ切テ可讀也

弄云

まいるしをん色の。おりにあひたる。うすも
世ノ常ニハ紫苑色ノ裳ト心得タル歎僻事也紫苑色ノ衣にうす物の裳也紫苑色トハおもてハ蘇方うらハ萌黄也

鮮
アヤカ
—
潔
アヤカ

のゝ裳あさやかにひきゆひたるこしつ

爽
アキラカ
トモ

きさはやかになまめきたり見かへり給て

すみのまのかうらんにしはしひきすへた

源ノタハムレ也

30

まへり打とけたらぬもひなしかみのさかり

中将君ノ鉢也 打とけぬ也

31

はめざましうもと見給ふ

爰ニテハホメタル心也

源氏ノ御心也

32

源氏

咲花にうつるてふ名はつゝめともおらて過うきけさの権

隆
御休所ヲムキテ又中将君ヘ心ヲウツスト云名ハツ、メトモト云心也

33

花云 権ハ中将ノ君にたとふる也是ハ権に女をたとへたる也毛詩ニ

34

有女同車ニ顔如三癖 花ニ云々

35

常磐松本は、〈三大書入れ〉を継承しているらしいのだが、注意したいのは、先の「空蟬」や「夕顔」巻頭の時とは異なり、ここではすべてそれが墨筆で記されているという点である。

例えば①行目右下の傍注 ②右下傍注 ③右傍注などは、各々「三大」或いは「隆」といった肩付をもち、穂久邇本①⑨⑬の注とも呼応することから、第一群〈三大書入れ〉であることは確かなのだが、朱筆ならぬ薄墨で記されている。常磐松本のこの薄墨は、本行とは別筆。むしろ後代書入れの筆跡と一部似通ったところもあるが、同筆とまでは断定できない。

ともあれ、常磐松本の〈三大書入れ〉部分は該書の書写が成った後に、加えられていたのであろう。その時加えられた〈三大書入れ〉としては、先ず①②③の三例が挙げられよう。更に②右の注文に対する訂正「しく」⑥物語本文に対す

る訂正「君」の二例なども、これに加えることが出来るかもしれない。

猶、③③左注の「御休所ヲミキテ又中将へ心ヲウツスト云名ハツメトモト云心也」であるが、穂久邇本⑫の「三大御息所ををかれて又心をうつされうずる事ハツメ^ミとともと云心也」と類似しているものの、常磐松本自身の後代書入れと判断した。③③には「三大」の肩付が入っていないこと。⑫と③③では本文に異同のあること、記された位置が異なること、即ち⑫では「見かへり給て」に傍書されてあるため、この本文に対する注とよまざるを得ないのだが、③③は源氏の贈歌に傍書されている（文意からみてこの注文は「咲花にうつるてふ名はつめとも……」の源氏贈歌に対するものである）から、記された位置は常磐松本の方が適切であろう。常磐松本の後代書入れ者は、しばしば『岷江入楚』を引いており、そこに「私 御息所を置いて又心をうつす事をはつめともと云義也 箋同之」の注がみえること、等の理由による。

以上、〈三大書入れ〉の入った常磐松本の「空蟬」「夕顔」について、本文の一端を分析してみた。ほんの数例を扱ったにすぎないが、これだけをみても、常磐松本には、〈三大書入れ〉の入っているが故に第一群の本文である、といった単純な論理では処理し切れない問題の内在することが了承されるであろう。両巻ともに、〈三大書入れ〉は、両巻の書写が成立したのち、部分的に引用されているにすぎず、しかもその引用の仕方かなり変則的だからである。よってこの両巻は、第二群の本文をベースにしなが、更に第一群の〈三大書入れ〉を部分的に投影させていったものとして位置付けておくことにする。

〈桐壺〉

「空蟬」「夕顔」は先の如く扱えるとして、ではもともと〈三大書入れ〉の入らない巻々は、一体どのように位置付けら

れるのだろうか。穂久邇本では全冊にわたって〈三大書入れ〉が記されてあるわけではない。もともと〈三大書入れ〉の入っていない巻の場合、常磐松本の書本が第一群本文であったのか、それとも第二群本文であったのかの判定には、それなりの困難が伴う。判定の基準を〈三大書入れ〉の有無に求められないからである。そうすると今度は、〈三大書入れ〉の入る以前に流れていった本文と、入って以後に写されていった本文と、各々の伝写過程において派生していったであろう異文というものに判定の基準を求めざるを得ず、そこでは当然、全写本を一列に並べての詳細な異同調査が必要となってくるだろう。そのうえで、諸本の親疎関係はどうなっているのか、異同状況からみて各諸本はこれをいくつかの小グループに分類し直すことができるのか、できるとすれば、その中にあって常磐松本は一体どのような動きをみせているのか——等々の分析が試みられるわけである。

今、常磐松本全冊にわたってかかる調査を試みる余裕はない。次善につぐ次善の策として、本稿では「桐壺」を例に考えてみようと思う。冒頭の一〇丁ばかりの中から、諸本の際立った対立例や常磐松本「桐壺」の性格を示唆するとみられる異同例等をいくつか紹介し、各々について翻字し解析を試みることにする。

対校したのは次の十四本である。(一)内に本稿で用いた略号を示しておいた。

- ① 穂久邇文庫蔵本(穂) ② 国立国会図書館蔵宝永二年奥書本(国) ③ 宮内庁書陵部蔵桂宮本(桂) ④ 東京大学国語研究室蔵本(東) ⑤ 静嘉堂文庫蔵本(静) ⑥ 学習院大学蔵三条西旧蔵本(学) ⑦ 野村精一氏架蔵本(野) ⑧ 実践女子大学文芸資料研究所蔵三条西家旧蔵本(三) ⑨ 実践女子大学図書館蔵常磐松文庫本(常) ⑩ 前田尊経閣文庫本(尊) ⑪ 天理大学図書館万治奥書本(万) ⑫ 同、青谿書屋旧蔵本(青) ⑬ 同、白水旧蔵本(白) ⑭ 同、九条家旧蔵本(九)

(1) 桂宮本見返しには次の付箋が貼付されている。

雪山童子ト云ハ阿羅ニ仙人ノ尺尊ヲタメシタル事也／先諸行無常是生滅法ト云偈ヲ授テイカニモ此千丈ノ夜刃鬼神
飢テ不能説汝カ血肉ヲ食ノ此次ノ偈ノヲ可説ト云テ鬼神口ヲ明テ居タル所ヘ為レ法ノ捨全身ニ被ニ飛入タル事也
其後尺尊全身聊モ無別儀一生ノ滅々已寂滅為楽ト云残ノ偈ヲ傳ヘ申タル事也

諸本はこの付箋の有無によって次のように大別できる。

(1) — ① —
 (イ) (付箋有り) …… 桂・静・学・常・尊・白
 (ロ) (付箋無し) …… 穂・国・万・東・野・三・九・青

この付箋は、本来ならば「総角」に付くべきものである。事実、(桂・常)は「総角」にもこれと同じ付箋が貼付されているし、(東・三・青)などは、「桐壺」の代りに「総角」の方に付いている。(野・九)は「総角」が欠本となっているために不明。

然るに(穂・国・万)、の第一群三本の場合、この付箋はいずれの巻にも付いていない。

猶、この三本は、本行は無論のこと、改行の仕方や傍注・頭注の有り様、訂正や引込線のひき方に到るまで、酷似している。これは『覚勝院抄』全冊にわたってみられる現象であることが、平成三年夏、文芸資料研究所が私学財団の助成を得て行なったところの研究テーマ「写本から版本へ——書誌の文明史的考察——」に基づく共同調査の際に確認されている。

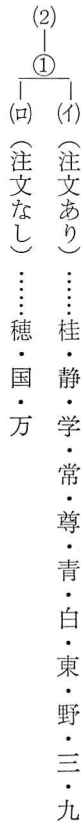
そこで先の異同(1) — ① — に戻るが、先ず(穂・国・万)は親子本として一括することが出来るように思う。第一群本は後代になって加えられた例の〈三大書入れ〉等、若干の例外を除けば、ほぼ初期稿本の面影を伝えているといえるようである。従って、かかる(穂・国・万)と同じく(ロ)に分類されたところの(東・野・三・九・青)の五本は、(イ)に分類された

(桂・静・学・常・尊・白) などよりは、第一群に近い本文かという見通しを付けられるやもしれない。無論(1)は、剝離散逸しやすい付箋の例であることゆえ、これだけを以てかく断定するつもりはないが、見通しは見通しとして、以後、注意して眺めてゆくことにしよう。

(2) 桂宮本一丁表に「女官之次第」と題された次の注文がある。(波線①等稿者。以下同様)

女官之次第／尚侍大臣女近代断絶／典侍公卿女四人也／掌侍六人此内以二内侍為勾當／命婦醫 陰陽道 八幡別當等女也／下臈賀茂日吉社司等女也／得選三人配膳ナトスル人也／采女／刀自内侍所ニ在之者也／女官 御末ノ人也／主殿司／女婦／以三稱名院自筆本一写之

諸本は先ずこの注文の有無によつて、次のように大別される。



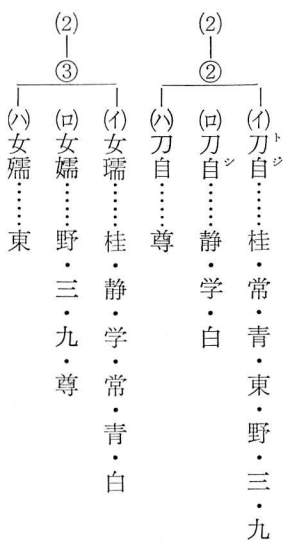
注文のあるのは、(イ)に挙げた十一本以外に東海大学蔵桃園文庫旧藏中山本等現写本もこれに該当する。このうち(東・野・三・九)それに中山本の五本が、貼紙に記されており(但し東大本は「桐壺」二七丁表に貼付)、残る六本は本文料紙に直接書入れられている。

一方、注文のないのは(穂・国・万)である。従つて、ここでは第一群の三本だけが、他の諸本と対立していることになる。本例なども第一群本文の独自な特色として、注意してよいのではあるまいか。想像にすぎないが、(穂)にはもともこの付箋があり(文末に「以三稱名院自筆本一写之」とあるところをみるに、由緒ある注文のようである)、ところが付箋のこととて、これがどこかに紛れてしまった。紛れる以前に写されていたものがあり、紛れた後に写されたものが

あつて、前者の流れをくむものは(イ)、後者は(ロ)と分類されたものではあるまいか。傍証の仕様のない推測だが、かかる可能性も含む異同として、留意しておきたい。

すると(1)―①で(穂・国・万)に一致した(東・野・三・九)だが、ここでは逆に対立してしまっている。とはいふものの、この四本は注文を貼紙の形で有しているのである。よつて貼紙・書付如何なる形であれ、注文を有した十一本はやはり第一群とは異質であり、しかも十一本中、貼紙をもつた(東・野・三・九)の四本は残る七本とは、やはり一線を画しているか、との見通しがもたれるようである。

再び異同図に戻る。(イ)の十一本は、貼紙・書付いずれの形にせよ、ともかく(2)の注文を有することでは一致した。但しその注文には二ヶ所ほど本文に異同がある。波線部が次のように分れるようである。



(2)―③で(イ)に分類された(桂・静・学・常・青・白)の六本は、先にみてきた(1)―① (2)―①の異同表においても一つにまとまつており、乱れることはなかった。この六本で一つの小集団を形成しているのかもしれない。就中(2)―②では(静・学・白)が同じ「刀自^ヅ」の訓仮名をおいている。六本の中でも特に親しいのだろうか。ともあれ、この六本が集団化しているか否かについても、以後注意してみてゆくことにしよう。

(3)穂久邇本によれば、一丁表は白紙。裏に総論的諸注を適宜抜粋したかの如き注文が記され、二丁表は「源氏物語聞書」の内題、「桐壺」の巻名、以下総論的記事が続いてゆく。

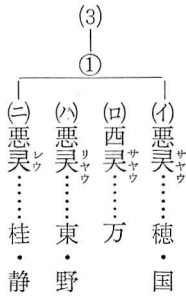
さて、この一丁裏の注文は、二丁目からの本行とは明らかに別筆である。おそらくは本行が成ったのちに前遊紙裏面に書入れられたものであらう。「桐壺」は無論、他の諸巻においても、頭注や付箋の一部等で、これと同筆とみられるものが混在しているようである。またこのくだり、諸本にこれを欠く本文がみられぬことから、早期（少なくとも〈三大書入れ〉以前）に書入れられたものと認められる。次に示すのはその一部である。

茲家

一光^①少将ト云人在也天下第一美人ト云ミ惡^②矣大臣ト云人ノ子也此^③心ヲ含^④テ書也光ト云事ハ／善堯ヲ繼ト云テ諸道ヲ継事ヲ光ト云也云々

一ウツホ濱松竹取皆物語ノ名也寢覺ト云モ在也榮花物語 赤染衛門作也／一紫式部ハ惟^⑤規ヲ妹紫式ヲ父越俊守為時也宣孝ト紫式部ハ嫁ノ大貳ノ三位ハ／誕生シタル也然大貳三位ハ紫式部カ女也云々／紫式部カ諱ハ不^⑥レ見此物語を為時カ加^⑦筆ト云説アリ其ニテハ／無曲一身^⑧ノ書也

諸本間に本文の異同がみられた波線部の①～④について、異同状況を示す。



(ロ)の「西」は「惡」の略字であらう。また(穂・国・万)グループ (東・野・三・九)グループ (桂・静・学・常

・尊・青・白)グループと訓みは三つに分れる。このうち(イ)と(ニ)の訓みは明らかに異なっているが、(イ)(ロ)と(ハ)は、「リヤウ」の「リ」に横線が入れば「サ」に紛れやすい。底流に於ける何がしかの結び付きが窺われるところである。

(3) ② (イ)此心ヲ含テ書也 (割注として記す) ……穂・国・万・東・野・三・九
(ロ)此心ヲ含テ書也 (本行扱い) ……桂・静・学・常・尊・青・白

(3) ③ (イ)加筆……………穂・国・万・東・野・三・九
(ロ)如筆……………桂・静・学・常・尊・青・白

(3) ④ (イ)書也……………穂・国・万
(ロ)書タル也……………東・野・三・九・桂・静・学・常・尊・青・白

いずれに於いても、(穂・国・万)と(桂・静・学・常・尊・青・白)とが対立しているのに対し、(東・野・三・九)は前者についたり後者についたりしている。稿本グループとそうでない本文群との間で揺れているようである。

(4)内題下の割注に次のような異同がある。

・源氏物語聞書 或説并料間加之^①

・桐壺 第一 此聞書此紙一丁ノ詞稱名院仍覺被^レ遂ニ一覽ニ^②
逍遙院作云々 弄花ノ序也 追ト肖相讀也

(4) ① (イ)或説……………穂・国・万・東・野・三・九・青
(ロ)或説……………桂・静・学・尊・白
本ノマヽ
本ノマヽ
或説……………常

(4) ② (イ)料間……………穂・万・桂・静・学・常・青・白・東・野・三・九

「(ロ)料簡……国・尊

(4)―②では珍しく(国)と(穂・万)に異同が生じている。

(4)―①のくんだり、(尊)は「或説」とし、これに同本独自の校合の青墨「扶華書志」によれば、松雲公が玉井氏本によって校合させた青墨という)が入って傍書「本ノマム」が付いた。かくの如く、もともと「本ノマム」の傍書が付いたものとそうでないものと、諸本は二つに大別されていたのだろう。(常)は、はじめは(桂・静・学・白)と同様「本ノマム」を入れていたのだが、のちにこれに墨で抹消線をひいている。書本通り「本ノマム」と書写したものの、やがてこれを付けない本文に出逢って訂正したものか。同様の異同例は、同じ二丁表に記された次の注文の中にもみえている。

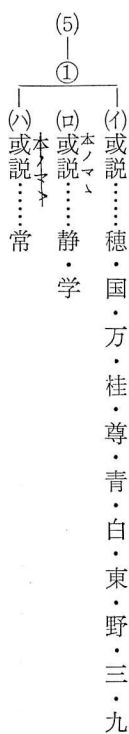
(5)巻名の次に記された総論的記事の冒頭である。

時代寛弘ノ初造ニ出之ニ康和流布寛弘ヨリ文明十年迄四百八十余年也然者元龜二年マテハ五百七

作者紫式部ハ藤原ノ為時カ女也或説見ニ河海抄ニ并十四才

花鳥餘情等ニ也

波線部のくんだり、諸本は次のように分れている。



ここで諸本は「康和」――「康和」――「見ニ河海抄」――「見ニ河海抄」等々、送り仮名や一二点の付け方等で多少の異同を生じているが、注目されるのは波線のくんだりである。図に分類した如く、(4)―①で「本ノマム」の付いた(桂・静・

学・尊・白)のうち(桂・尊・白)は(静・学)から離れて(穂・国・万)と一致している。だが(静・学)は(4)に続いてここでも又「或説」^{本ノマ}としている。(常)が、はじめは「或説」^{本ノマ}とし、のちにこれを抹消しているのも同様である。

それにしても、(4)といひ(5)といひ、「或説」に「本ノマ」が付いた本文と付かなかった本文とが生じたのはなぜだろう。思うにこれはこういうことだったのであるまいか。

『覚勝院抄』の総論的記事は、先ず「源氏物語聞書或説并料間加之」という内題・割注部分も含めて、初めに『弄花抄』序文を引用し、次に『花鳥余情』の引用、更に講尺時の聞書等々を掲載している。そして穂久邇本によれば、この『弄花抄』からの引用部分は、丁度料紙一丁分(第二丁目表裏)に記入されている。してみると、『覚勝院抄』が巻名下に「此聞書此紙一丁ノ詞稱名院仍覚被ニ覧ノ追遙院作云々 弄花ノ序也 追肖相讀也」とした「此紙一丁」とは、野村氏論文(前掲)にある如く、まさにこのことを指しての意であつたのだろう。

ところが、やがて本行(『弄花抄』序文の引用部分)の上には、新しく「三重説」が書加えられた。そしてかかる稿本が清書され、転写されていった間に『弄花抄』序文からの引用部分はいっしょに一丁をはみ出してしまった。

そうなると後代の書写者は、追遙院御作で、稱名院にも一覧を賜わった云々……という「此紙一丁ノ詞」の意味が分らなくなってしまったのではあるまいか。

内題及びその下の割注にしても同様である。これは『弄花抄』の記述を転載したにすぎないのだが、それが分らないと混乱を招くことになる。後代の利用者は次のように考えたのではあるまいか。即ち内題に「源氏物語聞書或説并料間加之」とある以上、本書は「聞書」をベースに、これに「或説」と「料間」を加えたもの、ということになる。だが「料間」めいた本行の上には「或説」ならぬ「三重説」が記されている。これは「三重説并料間加之」が正解ではないのか——ということ、いつの時点でか「或説」^{本ノマ}とされ、それが継承されていったかとみられるのである。

(6)前掲(5)に後続する注文である。

作意大斎院選子内親王村上ノ皇女中宮ヨリ所望ニ

上東門院一条。后宮御堂殿女ニ之時式部即テ作テ進レ之云々

連々用意乎 詣三石山ニ得ニ趣向ニ之由河海ニ見ヘタリ但シ

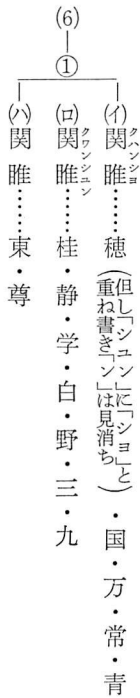
翻ニ般若書之説無レ実乎 大意ハ君臣父子夫婦朋友ノ

道以教人ニ也 関クワン睢シ詩ノ之徳了レ見又模ボ莊子寓言

更ニ有リ一字ノ廢ホウ貶ヘン明メ盛者必衰會者定離ノ理ニ而已

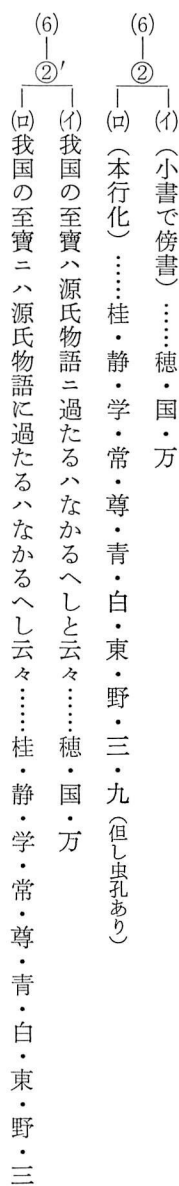
②我國の至寶ハ源氏物語ニ過たるハなかるヘシト云々

定家ノ卿閑談ノ説別に記之……………」(2ウ)



諸本の訓みは(イ)「クハンシヨ」か(ロ)「クワンシユン」かで対立しているようである。「睢」の訓み、(穂)は初め「シユン」と記し、のち墨筆にて「ユ」に「ヨ」を重ね書き、「ン」に見せ消ちを付すなどして、これを「シヨ」と訂正したようである。(国・万)が「シヨ」とあることから、穂久邇本の訂正は〈三大書入れ〉以後のものであったか。すると、訂正以前の(穂)と同じ訓み仮名をもつ(桂・静・学・白・野・三・九)の諸本は、〈三大書入れ〉が入る以前に写された本文の系列をひくか、と予想できるやもしれない。但し(常)は「シヨ」となっている。これは「クワンシユン」では馴まないのか、かく訂正したものか。

波線部②は、穂久邇本によれば本行とは別筆である。諸本は表記方法と本文自体の異同によって、次のように分類される。



穂久邇本によれば、波線②の文章は二丁表の最終行の左傍に小書されている。二丁表の本行は「……又模莊子寓言更有一字慶昫明盛者必衰會者定離理而已」でおわり、続く二丁裏は「定家ノ卿閑談ノ説別に記之」で始まっている。前者は『弄花抄』『作意』からの引用、後者は同「古来称美」の末文である。

『弄花抄』『古来称美』の項には

古来称美

古人各不可説云々順徳院御記等見花鳥——我国之至宝は源氏物語に過たるはなかるへしと云々定家卿閑談之説別記之とあり、穂久邇本は初め、この中の末文「定家卿……」だけを二丁裏に記したわけである。その後、二丁表裏には頭注部分に〈三垂説〉の書入れがなされ、更にその後になって二丁表に波線部②の書入れがなされた。波線部②の一文は「古来称美」のものであり、従って本来ならば「定家卿……」と同じ二丁裏に記す方が望ましい。だがそこには既に三垂説書入れて余白がなく、やむなく二丁表の末に、それも小書で傍書したものと解される。

その点では、これを本行化した(桂・静・学・常・尊・青・白・東・野・三・九)の処置は正しい。逆に(穂)の体裁をそのままに継承した(国・万)の方は、この波線部が、同じく小書で記されたところの頭注(三垂説)の一部ともうけ

とられかねないようである。

(7) (穂) 二丁裏の総論。(6)の続きで、本段までが『弄花抄』引用部分である。

或説云一部乃作意比ニ天台四教ノ法聞ニ云々准ニ據桐壺ノ帝ヲ

醍醐ノ天皇ニ以下河海抄貴ヲ聖代ノ之故ニ延喜ヲ為ニ最

初ニ也光源氏雖トモ准ニ西宮左府高明公ニ西源氏而又周公

丹東征菅家在中將沈淪等并比レ之不ニ模一樣ニ用

ニ拾随テ宜ニ也仁明御子源氏右大臣正ニ光君寧ニ通ノ

女御等ニ事准ニ在羽林ニ好色粗相似乎

五条三品京極ノ黃門之比賞翫云々私云俊成并定家ノ事也

題号全篇以ニ光源氏ノ君ヲ為レ詮故ニ号ニ源氏物語ト者濫レ觸

小水ニ為ニ九河之源ト之義説而用意也此物語亦タ含ニ其

理ニ仍累世握翫也又水源有ニ口事ニ握翫ト云ハ左右ヲハナ

タスノ見ヨト云事也岷江ト云所ソタル流水也蓋ヲ浮テ流ス所也末ハ一段之矢川也

(イ) 或説……穂・国・万・桂・静・尊・青・白・東・野・三・九

(ロ) 或説……字

(ハ) 或説……常

(4) ①・⑤につづいて三度目の「或説」である。諸本中(学・常)は三度とも「或説」とし、猶かつ(常)は三度とも

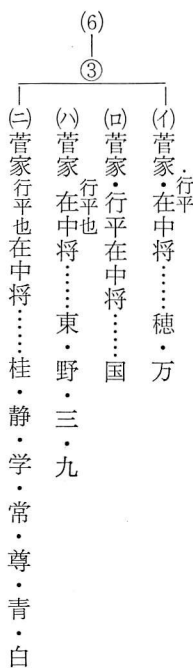
これを訂正している。(常)は(桂・静・学・尊・青・白)グループの中でも特に(学)に近いのであろうか。



「准」の送り仮名に関する異同である。「雖_ニ准_ニ西宮左府高明公_ニ」とある以上、ここは(ロ)の「准スルト」となるべきところである。

だが(穂)の書きぶりをみると、「スルソ」とも、又「スルノ」の「ー」を「ト」の略とみれば「スルトノ」とも、両様によりとれるようである。もともとは「准^{スルノ}西宮^ノ」とするつもりが、二つの傍書「ー」と「ノ」とを近付けすぎ、そのために「ーノ」という連語或いは「ソ」という一文字に似てしまったのかもしれない。

ともあれ、諸本は「スルト」「スルトノ」「スルヲ」の三つに分れてしまい、(常)はここでも又、初めは(学)等と同様「スルトノ」の本文をもち、のちにこれを訂正している。



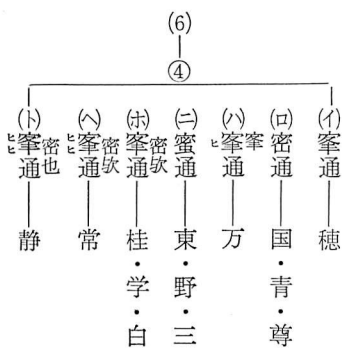
③は光源氏の須磨流謫の準拠を論じたくだりにある。従って(穂)の傍書「行平」は、当然在原行平のこと、つまり

「在中将」の説明とよみとれよう。但し(穂)では、「行平」の傍書を「在中将」の右肩に置いてしまっている。^{業平}在羽林」の例などをみるに、それがこの書写者の書癖であったのかもしれないが、見方によっては、これは「菅家」と「在中将」との中間に記されたとも受けとれよう。加えて「在中将」と「行平」との頭には各々句点がついている。この句点も又、見方によっては補入記号「。」のつづれたもの、ともうけとれよう。

(国)は(穂)の記載をこのように解釈して、「行平」を本行化してしまったのではあるまいか。但し(国)では「菅家」の下に句点をうち、一方「行平」と「在中将」の間は句点がない。よってここは「菅家・行平在中将」の意で解説して、いたものと思われる。

一方、他の八本は全て「行平也」としてあることから、(穂)の傍書を「在中将」に関する傍注と解釈したようである。但し(東・野・三・九)はこれを傍注のままとし、(桂・静・学・常・尊・青・白)はこれを割注とした。

前者は、(穂)と意味的に大差はない。ところが後者の場合、「行平也」の割注を「菅家」の下に入れてしまっている。その結果、これは「菅家」に対する注となり、まことに珍妙なことになってしまった。



(九)は虫損。(6)―④で(穂)は「牽通」と宛字を使った。これが諸本の異同をひきおこしてしまったようである。先ず(国)はこれを正字「密」に改めた。(青・尊)も然り。

一方、(桂・静・学・常・白)は(穂)の宛字をそのまま継承しつつも、「密歇」或いは「密也」と校勘を傍書し、(東・野・三)は今度は「蜜」の宛字を用いている。(東・野・三)と(桂・静・学・常・白)とでは、やはりどこかで一線がひかれているように感じられる例である。次の⑤も然り。分りやすく、前後の本文も含めて異同を示してみよう。

- ⑤
- (イ)又水源有ニ口事「握翫ト云ハ左右ヲハナタス」見ヨト云事也……穂・国・万
 - (ロ)又水源有ニ口事「握翫ト云ハ左右をハナタス」見ヨト云事也……東・野・三

即ち(穂・国・万)が「ト云ハ」だけを小字右寄せにしたのに対し、(東・野・三)は「握翫ト云ハ」以下「見ヨト云事也」までの一文全体を、小書している。これはその前に「仍累世握翫也」という本文のあることから、波線部⑤以降を、この本文部分に対する注文と解したためであろう。一方、(桂・静・学・常・尊)は「握翫ト云ハ」だけを右寄せに小書し、以後は普通に続けている。

書き方についての異同は以上のようになるが、このくだり、本文自体にも小異がみられるようである。

- ⑤'
- (イ)左右ヲハナタス——穂・国・万
 - (ロ)左右をハナタス——東・野・三・九・青
 - (ハ)左右をハナタス——桂・静・学・尊・白
 - (ニ)左右をハナタス。——常

(東・野・三・九・青)は(穂・国・万)の「左右ヲ」を「左右を」と仮名書きすることによって、その下の「ハナタス

……」と区別する点では、(桂・静・学・常・尊・白)と同様であるが、「ハナタスノ」とする点では、逆に(穂・国・万)に一致する。

一方、(常)は本行は(桂・静・学・尊・白)と一致するが、のちに訂正して「ノ」を入れている。これまで幾度か出てきたのと同じパターンである。

以上が『弄花抄』からの引用部分である。次に、この引用部分の上欄余白に頭注として書入れられた三亜説の中から、興味深い異同例を抜粋してみよう。穂久邇本二丁裏の頭注である。

⑧一毛詩関雎天下ヲ后妃ノ徳トス云々女ノ事ヲ先ニ云也乱ルムモ政マルモ女ヨリ也先此事ヲ云立テカラ余ノ三昧ヲ云也乱タル所ヲミセテサテヲサムル所ヲ云テミスル也是ヲアシクミルコト邪道也云々

一何レノ集ニモサアルニ依テ恋ノ部ヲハ多入ラレタル也ハヤ千首トモアルニハ恋ハ五マテ在之也根本ノ乱モ政モ恋也云々諸事ハ皆六欲七情ヲ不離モノ也喜奴哀思悲恐驚醫書ナトニハ喜奴憂思トト云々相違也



(穂)は「政」の字を用い、これで「おさまる」と訓ませているようである。(国・万)は今度はこの宛字を継承し、(東・野・三・九)も又、これを継承した。

ところが(桂・静・学・常・尊・青・白)の七本はこれと対立している。なかでも(桂・静・学・白)は本行ではそのま

ま「政」の宛字を継承したものの、傍に「治欵」「治也」と校勘を入れている。(常)はというと、この校勘の方を採用し

(イ) 悲・恐・驚……穂・国・万・東・野・三・九・尊

(口)悲·恐·敬……桂·静·学·白

(ハ) 悲恐敬……常・青

これまでと同様のパターンである。但し（常）はここで異文として「驚」の字も掲げている。そうである以上、（常）は

紙数もほぼ尽きてきた。最後に、諸本の異同の顕著な例を二つほど紹介してみよう。一つは穂久邇本四丁裏に記された

(9) 穂久邇本（四ウ）

[illegible]

[illegible]

河海
トム
名モ
は
テ
有ヘ

〔相模公同封〕テ内、四ツカ係成、依テ注ラセテ、館名事始ナレトモ、古今山下水、延
スト有ヤウニ漢家李朝ノ事、中書五注、神道佛、佛男女老若禽獸草木、アラ定々ニテ謂
立也。〔桐葉帝〕朱養院、御成院、今上天子、四代、五十七年ノ夏、ヲ書、終也。〔源氏君
ナヤ、戦ニテ元服ナレトモ、先ニ五六ニテノ事、ハ表ニ在テ、下ニ侍ノ一、朝、別ノ人ノ年、終テ、
前、後相違ニ、死、ちモ、主、教、替、タ、レ、ト、也、初、審、ニ、漢、別、ノ下、サル、ミ、又、目、ニ、梳、篦、ノ下、ト、替、ニ、又、目、ニ
割、立、ト、ム、リ、ニ、事、ハ、モ、也、ニ、ミ、ミ、タ、不、審、ナ、リ、左、之、ナ、リ

①
(口) (頭注なし) ……穂・国・万
(イ) (頭注あり) ……東・野・三・九・桂・静・学・常・尊・青・白

十本中、(穂・国・万)にのみ記されていない。これまでにみてきた異同例でも、この三本だけが共通して他の十一本と対立している例は多かった。するとやはり(穂・国・万)は、ここ「桐壺」においても、第一群初期稿本グループとして異彩を放っているとみられよう。

次に気付くのは、三垂説注文の記入の仕方である。(穂)(常)が各注文とも普通につづけて記しているのに対し、(三)は、写真の如く

一 桐壺帝朱雀院冷泉院今上天子四代五十七／……

一 源氏君十二才ニテ元服ナレトモ先十五六マテノ事カ／……

一 惣別人ノ年齢ノ事前後相違也花鳥も三度替タル／……

の各注文を、それぞれ横一列に並べて記してある。このくんだり、諸本の状況はというと次のようになっている。

②
 (イ) (続けて記す) ……穂・国・万・桂・静・学・常・尊・青・白
 (ロ) (横に並べる) ……東・野・三・九

これまで何度もみてきたように、ここでも又(東・野・三・九)はひとつにまとまって、独自の形態を示している。そして十四本中、第一群初期稿本とみられる(穂・国・万)を除く十一本は、第二群通行本グループとして常に足並みをそろえているわけではなく、(東・野・三・九)の四本は、のこる七本とは時に違った動きもみせるようである。それは次の例にもあてはまる。「二源氏十二才ニテ元服ナレドモ」のくんだり、諸本は次のような異同をみせている。

③
 (イ) 十二才ニテ……穂・国・万・東・野・三・九・青
 (ロ) 十二才マテニテ……桂・白
 (ハ) 十二才マテニテ……本マ静・学

(ニ) 十二才^{本マム}マテニテ……尊
 (ホ) 十二才^{本マム}マテニテ……常

根本的な異同は「ニテ」か「マテニテ」という点であろう。その点からみると、(東・野・三・九)はここでは(穂・国・万)について、(ロ)(ハ)の本文をとる六本とは対立していることになる。やはり八本の中でもこの四本は、少し異なっているようである。

では残る五本はどうかといえば、先ず「マテニテ」という本文を有し、(穂・国・万)といった第一群本文と対立しているという点では五本同じである。だが五本の中でも(静・学・常・尊)の四本には「本マム」がつき、更に(常・尊)はこの「本マム」を抹消、更に(常)は本行「マテニテ」の「マテ」にも見消しを付し、この訂正によって(穂・国・万)等の本文に立ち戻っている。すると(常)は本行においては(桂・静・学・尊・白)の諸本と同じであり、就中(静・学)とは強い共通性を示しているのだが、訂正によって第一群初期稿本の本文に立ち戻ることがある、といえるのではあるまいか。

更に次のような例もある。「古今山水ノ絶スト有ヤウニ」のくだり、

④
 (イ) 絶スト……穂・国・万・東・野・三・九・桂・青・白
 (ロ) 絶スト……静・学・常
 (ハ) 終スト……尊

(常)はここでも第二群通行本グループの中の(静・学)と強い結び付きを示しているようである。

[illegible]

— 97 —

い。今（穗）のその部分だけを翻字すると次のようになる。

三並ノ説

伊勢集ニ
書タルウツチタチ

事關タル様也
作去紫式部カ

心ハ旧キ詞ヲ取テ
新ク書事作意也

伊勢カ心ハ
我俗姓ヲ聞書

カクシテ七条ノ后ノ
事ヲ中サントメニ
如此書也……

河云
延喜の御時といはんとしてかやうにおほきなせる也

伊勢集にていつれの御ときにか有けん大宮すところと

きこえけると云々御をいづくにてもおゝんと
尾緒

よむへし。仁明天皇承和三年為二更衣ノ始一なり
（ミとも讀也）

「聞書」という肩付は、その上に書入れられた頭注「我俗姓ヲ」のすぐ下に記されてあるために、見方によっては頭注本文三並説の一部ととって「我俗姓ヲ聞書カクシテ……」とも読んでしまいかねない。

このように読んでしまったのが（国・万）である。該当する箇所のみ翻字すると次のようになる。

………伊勢
河云

延喜の御時といはむとてかやうにおほめき書なせる也
伊勢集にもいつれの御ときにか有けん大宮すところと

きこえけると云々御をいづくにてもおをむと
尾緒

よむへしとも讀也仁明天皇承和三年為二更衣ノ初一也

これは明らかに誤読である。

とはいふものの、（国）は（穗）の書入れ「^{ミとも讀也}」については、これを継承している。（穗）のこの書入れは、写真

からも判別できるように、本行とは明らかに別筆である。筆跡をみると、例の〈三大書入れ〉の筆ともかなり似通ったところがある。そして諸本中、この一文を有するのは(穂・国)の二本だけとなっている。「聞書」の位置に関しては誤読による対立がみられたものの、両本の共通性は依然揺がぬようである。

再び「聞書」の異同に戻る。(穂)の不明瞭な書き方が災いしたためか、諸本の中には(穂)の「聞書」を、今度は下の注文にかかるものとして読んでしまったものがあるようである。例えば(桂)。今、同本によって該当部分のみを翻字する。

河云

……伊勢カ心ハ
我俗姓ヲカクシテ七条ノ
后ノ事ヲ申サンタメ如此
書也……

延喜の御時といはんとてかやうにおほめき書なせるなり伊勢

集にもいつれの御ときにか有けん大宮聞書す所と聞えけると云々

尾緒

御をいづくにてもおゝんとよむへし仁明天皇承和三年為更衣始也

(穂)では注文全体の上に冠されていたはずの「聞書」が、ここでは注文の中の「大宮す所」の付近に下げられてしまっている。思うにこれは、一つには(穂)の「聞書」を注文「大宮すどころと」に続くものとして読んでしまったためであろう。加えて(穂)では注文の冒頭に「河云」という肩付がある。よって初めに『河海抄』からの引用があり、「聞書」による注文は大体この辺りからか……、とでもいった判断が働いたためかもしれない。

このように「大宮聞書す所」とあるのが、やはり(桂・静・学・常・尊・白)の六本なのである。(青)も又、「大宮す所」と、「聞書」をに入れていないが、間に不自然な空白をおいている。一方(東・野・三・九)の四本はかかる誤読を写すことなく、「聞書」は「河云」も含めた注文全体に対する肩付として読んだようである。今、野村氏蔵本の写真にて当該箇所を示す。

いぢきれぬうぢきり女御いあもろけ

いぢいけりふふとや殊に新ふまハ

おハけぬすけりて時をさ終りのなり

公卿のいけりていんごてうくみずりい書か

うい停務集いしめいものいしめいりん

いあもろけりていりていりていりて

いりていりていりていりていりて

いりていりていりていりていりて

いりていりていりていりていりて

いりていりていりていりていりて

よって（東・野・三・九）の四本は、同じく第二群通行本グループとはいえ、やはり他の諸本とは若干傾向を異にしているといえるだろう。

この点を再確認して、（常）に戻る。さきに（常）の書式は（桂・静・学・尊）に一致するとのべたが、実はそれは訂正以前のこと。ここでも又、（常）は訂正によって（桂・静・学・尊）から離れ、（東・野・三・九）に近付いたようである。

どうやら常磐松本「桐壺」は（一）同本独自の例の後代書入れがなされる以前には、第二群通行本グループの本文であったらしいこと。（二）但し第二群の中でも（桂・静・学・尊・青・白）グループ、就中学習院本に、近い本文をベースにしたがら、訂正その他によって、第一群本、ないしは第一群本としばしば共通項のみられた（東・野・三・九）等の第二群本文に近付いてゆく、といえるようである。